

『ゴリオ爺さん』にみられる嫌悪感 ― ラスティニャックがヴォートランに抱く嫌悪感が指すもの ―

棚橋 美知子

1 はじめに

悪魔との契約という伝統的文学テーマの基本構図は、悪魔に誘惑された人間が、悪魔に死後の魂の救済を譲り渡す代わりに、現世での知識、富、名誉などを得る契約を悪魔と結ぶというものである。このテーマを扱った文学作品としてすぐに思いつくのは、ファウストと悪魔メフィストフェレスが登場する、ゲーテの『ファウスト』であろう。このテーマは人間喜劇の作品群においても、伝統的な構図とは違った形ではあるが、しばしば見受けられるものである。その一つとして、『ゴリオ爺さん』¹(1835 年)においてヴォートランがラスティニャックに提案する取引に、バルザックにおける悪魔的契約の様相が指摘されている。

この作品において、ラスティニャックは最終的にその取引を結ぶことを拒否するが、ヴォートランがラスティニャックに取引を提案する場面以降、ラスティニャックはヴォートランに対して«*horreur*»(嫌悪感)を抱くようになる。しかし、ヴォートランに対するその嫌悪感が何を示すのかについては具体的に述べられていない。ラスティニャックが抱くこの嫌悪感の内容については様々なことが考えられるが、バルザックにおける悪魔的契約の本質を考慮するなら、それは自身の魂と肉体を支配されることに対する嫌悪感とも考えられるのではないか。この点を考察するにあたり、「アブジェクト」の概念にまつわるおぞましさが有効であると考えられる。

従って本稿はまず、アブジェクトを棄却する行為におけるおぞましいという感覚について確認する。次に、バルザックが描く悪魔的契約の本質的構造と、その構造が『ゴリオ爺さん』においてヴォートランがラスティニャックに提案する取引にみられることを、先行研究に依って確認する。そして、提示された悪魔的契約に応じた者の特徴を確認し、ラスティニャックがヴォートランに抱

く嫌悪感が具体的に何を示すのかについて、アブジェクトの概念を援用して検討する。

2 アブジェクトとある種の感覚

クリステヴァは「アブジェクト」(おぞましきもの/l'abject)を以下のように説明する。

アブジェクト [abject ab (分離すべく) +ject (投げ出されたもの)] は私と向き合った一つの対象 [ob-jet ob (前に) +jet (投げ出されたもの)]、私が名付ける、あるいは想像する対象なのではない。(中略) 対象が対立を通して、意味に対する欲望の壊れやすい枠組のなかで私を安定させ、そして事実、そのために私は限りもなく意味のなかで身を休らうとすれば、逆に、対象からずりおちたアブジェクトは徹底的に排除されたものであり、意味が崩壊する場所へと私を引き寄せる。自分の主人である超自我と融合したある種の《自我》がアブジェクトを断固一掃したのである。アブジェクトは外部にある。自分がどうやら承認していないゲームのルールをもった集合体の外にあるのだ。だが、この追放の地からアブジェクトは自分の主人に挑みかかるのを止めはしない。(主人に) 合図もせず、アブジェクトは排出、痙攣、叫び声を惹き起こす。(中略) それは(中略) 事物として私が認めない《何かあるもの》だ。²

アブジェクトとは、象徴体系に組み込まれないもの、名付けようとしてもすくいきれないもの、すなわち「対象からずりおちた」ものであり、象徴体系を揺さぶり、「意味が崩壊する場所へと私を引き寄せる」ものであるとクリステヴァは述べる。またそれは、同一性、体系、秩序を攪乱し、境界や場所や規範を尊重しない何か、³一定の象徴体系に固有の分類法則に違反する何かであり、⁴主体と客体との不安定な状態、自と他の同一性の不確定な状況でもある。⁵つまりアブジェクトとは、個人のレベルで考えるなら、主体と客体、自と他の境界線、一定の象徴体系、つまり自分を自分とさせているものを崩壊させる危険をはらむ「何か」であるのだ。クリステヴァによると、このアブジェクトを自分から切り離す、すなわち棄却することによって主体は主体としての境界線をつくっているのである。⁶

アブジェクトとは名付け得ぬもの、つまり対象とならないものである。しかし、人は名付けることで対象とし、それを象徴体系に組み込むことで象徴的に

理解していると考えるならば、対象とならないオブジェクトとは、それに接する本人にとっては、象徴的に理解できないものといえる。では、象徴的に理解できないとするオブジェクトはどのように捉えられるのだろうか。その存在を示唆する指標とでもいうべきものが、自分のなかにわき起こるある種の嫌悪感や嘔吐感、痙攣などのおぞましいという感覚である。クリステヴァによると、これらの感覚はオブジェクトの棄却行為の現れとして考えられる。⁷つまり対象とならないというオブジェクトは、その棄却行為の現れであるこのようなおぞましいという感覚によって、事後的にその存在が示唆されるのである。

オブジェクトとは、主客、自他の境界線、一定の象徴体系、つまり「私」の世界を崩壊させる危険をはらむ「何か」である。そしてまた、対象とならないオブジェクトの存在を示唆する指標の一つは、その崩壊をくいとめるためオブジェクトを棄却する際に自身の中にわき起こるおぞましいという感覚である。つまりこのようなある種の感覚には、「私」の世界を崩壊してしまうような「何か」（オブジェクト）に対する棄却行為が伴っていると考えることができるだろう。

3 『ゴリオ爺さん』にみられる悪魔的契約

3-1 バルザックにおける悪魔的契約

悪魔との契約というテーマは、バルザックの作品においてはどのようにあらわれているのか。村田京子の分析に基づき、バルザックにおける悪魔的契約の構図の概要を確認したい。

伝統的なスタイルでは、悪魔との契約というテーマには現世と死後という時間差、空間差が存在する。しかしバルザックの場合、死後の魂が現世の魂・世俗の人生に置き換わってこのテーマは現れる。つまりバルザックにおいては、悪魔との契約という伝統的文学テーマは、世俗の魂・人生を悪魔的存在にゆだねる代わりに、世俗の富や栄誉を手に入れる、もしくは現世の願いを叶えるという構図になって現れるのだ。

この構図の最も重要な点は、現世において、悪魔的存在が相手の魂と肉体を自分のものとし、それを自由に操り、自分の意志を反映させようとする点である。この点に、バルザックにおける悪魔的契約の本質があると村田は指摘する。

3-2 ヴォートランが提案する取引

『ゴリオ爺さん』は、バルザックが人物再登場法を初めて思いついた作品であり、彼が描こうとした人間喜劇の世界の核となる作品といわれている。この作品には、『あら皮』(1831年)においてすでにダンディとしてパリの社交界で名を馳せていたラスティニャックが再び登場する。『ゴリオ爺さん』ではそのラスティニャックがパリに上京したての若かりし頃が描かれており、彼を中心に据えてみるなら、当時の若者が「泥」と形容されるパリにおいてどのように成長していくのかという一種の教養小説でもある。

ヴォートランはこの作品において、まかないつきの下宿ヴォケール館に住む四十がらみの自称元卸売り商人として登場するが、実際には、彼は裏社会に君臨する脱獄囚であり、自分を閉め出した社会に対し復讐するという野心をもった人物である。この人物は、アングレーム近郊からパリへ法律の勉強にやってきた同じヴォケール館の下宿人ウージェーヌ・ド・ラスティニャックに対し、彼の出世を援助しようと執拗に申し出る。しかしその理由はラスティニャックの将来を案じてのことではない。それは、自身の代理をつくりだし、裏で操ってそれを社会で成功させることで、社会への復讐という彼の野心を実現させるためである。

ラスティニャックは勉学で身を立て、家族の期待に答えるために何とかして出世し、社会から利益を搾り取ろうという野心に燃えた青年である。彼はパリでの生活をするにつれ、出世するには勉学だけでなく、社交界へ参入し、そこでの人脉、貴婦人の後ろ楯が必要なことを理解するようになるが、裕福とはいえない地方貴族である彼には社交界の人々との交流についていけるほどの金銭的余裕はない。遠縁にあたるボーセアン夫人⁹⁾は、自身の名前を「アリアドネの糸」(117)としてラスティニャックに貸してはくれるが、彼に金銭的援助まではしてくれない。社交界で生きていくための金銭的余裕はないが、出世、栄誉への欲望が膨らんでいくラスティニャックを、ヴォートランは心の底まで見抜くその視線で見逃さなかった。

このような状態にあるラスティニャックに対し、ヴォートランはヴォケール館の庭に彼を連れ出し、ラスティニャックが百万フランの持参金がついた花嫁を手に入れるかわりに、二十パーセントの手数料をもらうという取引⁹⁾を提案し、それに応じるよう促す。

作中において随所で「誘惑者」«*tentateur*»、「悪魔」«*diable*»と呼ばれ、純粹

な青年を誘惑し墮落させようとする役割を担っていることから、人間喜劇の中で最も悪魔的な登場人物の一人と考えられているヴォートラン¹³はこの取引に躊躇するラスティニャックに対し、

君は美しく、繊細で、ライオンのように誇り高く、そして若い娘のように優しい青年だ。悪魔にとってはおいしそうな獲物だ。俺は若者のそういうところが好きだ。(中略) ああ！もし君が俺の生徒になりたければ、俺はどんなことだってしてやるのに。名誉、財産、女、たとえ何を望もうと、君が願えばすぐにそれが叶うのだ。(185)

と述べる。悪魔との契約を彷彿させるこの台詞は、まるでヴォートランがラスティニャックを誘惑しているような印象を与えている。また、ヴォートラン自身の台詞には« pacte » (契約) という言葉を直接見出せないが、語り手の言葉の中に« l'idée d'un pacte fait avec cet homme »(187) (この男と結ぶ契約という考え) とあることから、バルザックがこの作品を描くにあたって、既に« pacte » の概念を念頭に置いていたことは明らかであると村田は指摘する。¹⁴これらの点、そして彼が自分の代理を欲している点をふまえると、ヴォートランがラスティニャックに提案する取引は、悪魔的契約の様相を呈していると考えられるのだ。

¹³

3-3 ヴォートランの欲望

悪魔的契約の様相は、ラスティニャックに対するヴォートランの他の語りの中にも見いだせる。

これが君の報告書だ、若者よ。俺たちには、故郷に父、母、大伯母、二人の妹（18歳と17歳）、二人の弟（15歳と10歳）がいる。これが乗組員名簿だ。(中略) 俺たちには料理女中と使用人もいる。

Voici votre compte, jeune homme. Nous avons, là-bas, papa, maman, grand-tante, deux sœurs (dix-huit et dix-sept ans), deux petits frères (quinze et dix ans), voilà le contrôle de l'équipage. [...] Nous avons une cuisinière et un domestique, [...]. (137) (下線は筆者)

上記の引用部分は下宿屋の庭で取引を提案する場面、すなわち誘惑の場面において、ヴォートランがラスティニャックの実家の厳しい現状を要約してみせる場面である。それを考慮すれば、父、母、大伯母、妹、弟、料理女中、使用人

を持っている主語は、ここではラスティニャックだけであるにもかかわらず、主語が« nous »（俺たち）と一人称複数形になっていることがわかる。つまり通常であれば、主語は« vous »（あなた）などの二人称単数形であるべきところが« nous »（俺たち）となっているのだ。

このような« nous »の使用法に関して Françoise van Rossum-Guyon は、ラスティニャックと共犯関係を結ぶことを望むヴォートランが表れていると指摘している。¹⁴しかし村田はこの« nous »の使用法に関し、まるでヴォートランがラスティニャックの人生の中に深く入り込んでいるかのような印象を与えることにバルザックが成功している点を指摘している。¹⁵そしてまた彼女は、この取引の中に悪魔的契約の要素があることを考慮すると、この« nous »の使用法からは、相手の魂を自分のものとし、自由にそれを扱いたいというヴォートランの欲望が透けて見えることを指摘する。¹⁶

バルザックにおける悪魔的契約という観点をふまえるなら、この« nous »の使用法はラスティニャックの魂を所有し、自分の思いどおりにそれを操りたいというヴォートランの欲望の現れと捉えることができるだろう。このように『ゴリオ爺さん』には、相手の魂を奪おうとするヴォートランの欲望が確認できるのだ。

4 悪魔的契約を受け入れた側の視点

悪魔的契約を提示され、受け入れた側の人物をバルザックはどのように描いているだろうか。ヴォートランがラスティニャックに提案するこの悪魔的契約は、バルザックの青年期の作品『百歳の人』（1822年）のそれに連なるものである。¹⁷では、誘惑を受け入れた『百歳の人』の登場人物マリアヌはどのように描かれているかを見てみたい。そこには、「何か」が自身に侵入してきているのを感じるマリアヌが描かれている。

彼女は自分の心を占領したこの新たなあり方を押しのけようとしていたが無駄だった。彼女は、知覚には感じられないが心にはその侵入が感じられるような、液体の氾濫のように徐々に自身に近づいてくる不可視で、漠然とした、定義できない、自分でも分からない何か (*un je ne sais quoi*) を感じていた。¹⁸

彼女の魂を奪う「この新たなあり方」とはもちろん、彼女を操ろうとする百

歳の人の意思であろう。しかしここでは、マリアニヌの視点からこの状態を考えてみたい。上記の引用部分からは、彼女にとって不可視で、漠然とした、定義できない「何か」が彼女の心の中に生じていることがわかる。つまり、自分以外の意思に魂を支配される者は、「自分でも分からない何か」に心を支配され、自分が自分自身ではないように感じるのだ。⁹⁾

バルザックにおける悪魔的契約の本質とは、悪魔的存在が相手の魂・肉体を占領し、それを思い通りに操ることであった。このことを占領される側の視点で考えるなら、自分の魂・肉体が自分自身のものとは思えなくなるということだ。換言するなら、「自分でも分からない何か」によって、自分を自分として存在させているものが崩壊させられるということであろう。つまり悪魔的契約を結ぶということは、その契約を提示され受け入れる者にとっては、自身の固有性、主体性が脅かされる状態になることといえるだろう。

5 嫌悪感

5-1 ヴォートランに対するラスティニャックのある感情

ラスティニャックはヴォートランから取引を提案される場面以降、彼に対してある感情を抱くようになる。

ヴォートランに誘惑された直後のラスティニャックは、優雅ではあるが虚飾に満ちた社交界での生活による成功ではなく、法学を修め、自分の努力で地道に財産を築く生活を目指すことを決心する。しかしボーセアン夫人宅の夕食に招かれたラスティニャックは、生まれて初めて参加する豪華な夕食会を目の当たりにして感嘆し、その決心を翻す。その際彼は、自分が住んでいる下宿を一瞬思い浮かべる。

彼は極度の嫌悪感を感じたため、1 月には下宿を出ようと誓った。それはきれいな下宿に住むためであったが、同じくらい、ヴォートランから逃れるためでもあった。彼はヴォートランの大きな手が自分の肩の上にあるように感じていた。(151-152)¹⁰⁾

また、社交界での交流によってできた借金に悩まされるラスティニャックは、ヴォートランが提案したヴィクトリーヌとの結婚に財産作りのチャンスがあるように見え、自ら彼女を口説く。その様子をヴォートランに見られ、ラスティニャックは彼女と結婚するだろうと彼に指摘された直後、

この男（＝ヴォートラン）と契約を結ぶのかと思うと、体がほてって気分が悪くなった。彼はこの男に嫌悪感を抱いていた。(187)³

と語り手は伝えている。

そして、ヴィクトリーヌの兄の死によって、彼女がヴォートランの言った通り百万フランの持参金をもった女性になったことが下宿人達に分かり、以前彼女を口説いていた場に居合わせたヴォケール夫人がラスティニャックに声をかけたのに対し、

「マダム、僕はヴィクトリーヌさんと決して結婚しませんよ。」ウージェーヌはヴォケール夫人に対して言ったが、そこには嫌悪にあふれた感情が伴っていたので、同席者たちを驚かせた。(212)²

とある。このラスティニャックの台詞は声をかけてきたヴォケール夫人に対してのものだが、それに伴う感情は、その場に同席しているヴォートランに対してのものであろう。³

このように、ヴォートランの提示する取引に魅力を感じつつも、彼に対して嫌悪感を抱き、彼から逃がれたいという気持ちがラスティニャックにわき起こっていることがわかる。ラスティニャックが抱くこの嫌悪感、そして逃げたいという気持ちはヴォートランに対してのものだが、ヴォートランの何に対するものなのかは具体的に示されていない。この点を考えるにあたっては、クリステヴァのアブジェクトの概念が有効と考えられるので、アブジェクトの概念を援用しながらその意味を考えてみたい。

5-2 ラスティニャックが抱く嫌悪感

ヴォートランの欲望が現れている「*nous*」の使用法を、ラスティニャックの視点に立って考えるならどのようなことがいえるだろうか。ラスティニャックの家族（父、母、大伯母、2人の妹、2人の弟）、実家の料理女中と使用人、そしてボーセアン家。ヴォートランとラスティニャックの会話において、これらを持っている主語（動詞 *avoir* の主語）はラスティニャックだけであるはずだが、ヴォートランは自身も主語の一人に加えていた。このことは、ラスティニャックの固有性が反映されているはずのところに、ヴォートランが侵入してきているといえるだろう。つまり「*nous*」の使用法をラスティニャックの視点から考えるなら、彼はヴォートランの欲望によって自身の固有性を脅かされはじめてい

るのだ。²⁴

クリステヴァによるとオブジェクトとは、主客の境界線、一定の象徴体系、つまり自分を自分とさせているものを崩壊させる危険をはらむ「何か」であり、このオブジェクトを棄却することによって、主体は主体としての境界線をつくるのだという。対象とならないというオブジェクトを認識する手がかりの一つは、それを棄却する際に自身の中にわき起こる、嫌悪感などのおぞましいという感覚であった。すなわちある種の嫌悪感には、自身を崩壊させるようなオブジェクトに対する棄却行為が伴っていると考えられるだろう。

ラスティニャックがヴォートランに対して抱く嫌悪感をオブジェクトの概念に照らしてみるなら、この嫌悪感はオブジェクトを棄却しようとする際の反応として考えることができるのではないか。すなわち、ラスティニャックが抱く嫌悪感は、彼の魂と肉体を占領し、それを思い通りに操ろうとするヴォートランの欲望に対する、換言するなら、自身の固有性を脅かされることに対する棄却行為の現れとして捉えることができるのではないだろうか。

6 おわりに

本稿では、ヴォートランに対してラスティニャックが抱く嫌悪感が具体的に何を示すのかについて考察してきた。それは、ヴォートランの共犯者になること、また、目的を果たす為なら殺人も意に介さない彼の態度等、様々なことが考えられる。しかし、バルザックにおける悪魔的契約、そしてクリステヴァのオブジェクトの概念を考慮に入れるなら、ラスティニャックがヴォートランに対して抱く嫌悪感は、自身の固有性を脅かされはじめていることに対する棄却行為の現れとしても考えられるだろう。つまり彼が抱く嫌悪感は、クリステヴァのいうおぞましいという感覚に近いものとしても考えられるのではないだろうか。

また、ヴォートランがラスティニャックに提案する取引に関して、バルザックが悪魔的契約の概念を念頭に置いていたと考えるなら、当然マリアヌにみられるような、提示された悪魔的契約に応じた者の視点もふまえていたと考えられる。このことから、クリステヴァが哲学的に分析したある種のおぞましさについて、バルザックはラスティニャック、ヴォートランという登場人物を創出することによって表現していたともいえるだろう。²⁵

注

- 1 Honoré de Balzac, *Le Père Goriot*, dans *La Comédie humaine*, Bibliothèque de la Pléiade, tome III, Paris, Gallimard, 1976. *Le Père Goriot* (『ゴリオ爺さん』)の引用は全てこの版からのもので、本文・注ともに引用の際は後にページ数のみを記す。また、本文中における *Le Père Goriot* の引用は全てこの版からの拙訳である。
- 2 Julia Kristeva, *Pouvoirs de l'horreur, Essai sur l'abjection*, Collection « Tel Quel », Paris, Éditions du Seuil, 1980, pp. 9-10 (Abréviation : *P.L.*). 本文中の *Pouvoirs de l'horreur* の和訳は、枝川昌雄訳『恐怖の権力』(法政大学出版局、1984年)を参照した。
- 3 *Ibid.*, p. 12.
- 4 ジュリア・クリステヴァ著、枝川昌雄訳『恐怖の権力』法政大学出版局、1984年、p. 406。
- 5 Julia Kristeva, « Pouvoirs de l'horreur », *Tel Quel*, 86, Hiver 1980, p. 50.
- 6 クリステヴァはこのような主体のあり方を« *sujet en procès* »とよんでいる。この« *en procès* »の意味に関しては、以下の西川の考察を参考にしたい。「プロセにある主体は、常にサンボリックでありかつセミオティックであるという異質的矛盾をかかえて葛藤と係争の渦中にある。プロセ *procès* という単語が訴訟・係争を意味するのであるからには、意味生成過程にある主体とは、常に係争中の主体でもある。そこにおいては、超越論的自我としての主体は、ル・セミオティックの流入によって告発され、裁かれている。＜語る主体＞は、過程にある主体、すなわち告発され裁かれる係争中の主体なのである。」(西川直子『現代思想の冒険者たち 30 クリステヴァ —ポリロゴス』講談社、1999年、p.140.)
- 7 *P.L.*, pp. 10-12.
- 8 Kyoko Murata, *Les métamorphoses du pacte diabolique dans l'œuvre de Balzac*, Sakai, OMUP, 2003, p. 44.
- 9 同じ貴族でありながら財力に富み、社交界での権力もあり、パリ社交界の中でも最も閉鎖的なサロンを持つ一人。そのボーセアン夫人のサロンに出入り出来る許可をもらったことで、ラスティニャックは社交界に顔を出す事ができるようになる。彼女から社交界の教訓を教わり、実際に社交界へ参入することによって、彼は社交界というものを学習していく。
- 10 具体的には、ラスティニャックに好意をよせている同じ下宿人ヴィクトリーヌ・タウフェル嬢の境遇を利用し、その兄を殺害することで彼女が父親の唯一の相続人にならざるを得ない状況をつくり、彼女をバリーで一番の持参金をもった花嫁に転身させる。そしてラスティニャックが彼女と結婚し、彼が得る百万フランの持参金のうち、手数料としてヴォートランが二十万フランもらうというものである。このように、ラスティニャックに提案する取引の内容には、殺人という要素が含まれている。
- 11 Kyoko Murata, *op. cit.*, p. 125.
- 12 村田京子「*Le Père Goriot* における *paternité* の問題」大阪女子大学外国文学篇紀

- 要、47、1995年、p. 258。
- 13 *Ibid.*, p. 258.
また村田は、「je vais vous faire une proposition que personne ne refuserait. » (141)、
« ce que je vous propose » (142)、
« ce que je vous demande » (142)等のヴォートランの
台詞からも「pacte」が暗示されていると指摘する。
- 14 Françoise van Rossum-Guyon, « Vautrin ou l'anti-Mentor », *Equinoxe*, 11, 1994, p. 79.
- 15 Kyoko Murata, *op. cit.*, p. 168.
- 16 *Ibid.*, p. 168.
- 17 *Ibid.*, p. 150.
- 18 Horace de Saint-Aubin, *Le Centenaire, ou les deux Béringheld*, tome IV, Paris, Les
Bibliophile de l'Originale, 1962, pp. 40-41.
- 19 ここではマリアニヌの内面に注目しているので触れていないが、彼女は自身の肉
体も自分のものとは思えなくなってきた。
- 20 原文は以下である。
[...]; il en eut une si profonde horreur qu'il se jura de la quitter au mois de janvier,
autant pour se mettre dans une maison propre que pour fuir Vautrin, dont il sentait la
large main sur son épaule.
- 21 原文は以下である。
Après avoir subi le malaise d'une fièvre intérieure que lui causa l'idée d'un pacte fait
avec cet homme dont il avait horreur, [...].
- 22 原文は以下である。
— Madame, je n'épouserai jamais Mlle Victorine », dit Eugène en s'adressant à Mme
Vauquer avec un sentiment d'horreur et de dégoût qui surprit les assistants. (下線は筆
者)
「un sentiment d'horreur et de dégoût」という表現においてバルザックが「horreur」と
「dégoût」を同列に扱っていることが示しているように、ここで取り上げている
ラスティニャックが抱く「horreur」は、「恐怖」というよりむしろ「嫌悪感」と
理解する方が文脈的にも一般的にも適切であると考えられる。
- 23 ラスティニャックはヴィクトリーヌに対して嫌悪感を抱いていない。またこの場
面において、ヴォケール夫人がラスティニャックに声をかける直前、ヴォートラン
はその場にいた下宿人たちの前で、「Voilà ! dit Vautrin en regardant Eugène, hier
elle était sans un sou, ce matin elle est riche de plusieurs millions. » (212)と言い、ラス
ティニャックに対して取引の存在をほのめかしていることから、ラスティニャッ
クがここで抱く嫌悪感は、ヴォートランに対するものと考えられる。
- 24 このような箇所は他にも確認できる。一例として以下の箇所を挙げる。
« [...], il vous faut trois chevaux et un tilbury pour le matin, un coupé pour le soir, en
tout neuf mille francs pour le véhicule. Vous seriez indigne de votre destinée si vous ne
dépensiez trois milles francs chez votre tailleur, six cents francs chez le parfumeur, cent
écus chez le bottier, cent écus chez le chapelier. Quand à votre blanchisseuse, elle vous
coûtera mille francs. [...] Nous sommes à quatorze mille. [...] Allez, mon enfant, nous

en avons pour nos petits vingt-cinq mille par an dans les flancs, ou nous tombons dans la crotte, nous nous faisons moquer de nous, et nous sommes destitué de notre avenir, de nos succès, de nos maîtresses! [...] » (178)

ここは、パリ社交界の人々に認められる暮らしをするための必要物とその金額を、ヴォートランがラスティニャックに語る場面である。最初は「*si vous ne dépensiez trois milles francs*」とあるように、「vous」、つまりラスティニャックを主語にして述べている。しかし途中から「*Nous sommes à quatorze mille.*」などのように、ラスティニャックが主語であるべきところが、「nous」にすり代わっていることが確認できる。この場面において、社交界での成功、そしてそのための費用が関係するのはラスティニャックのみのはずである。

- 25 本稿に沿って考えるなら、ラスティニャックに対するヴォートランの欲望はアブジェク트의要素をはらんでいるといえるだろう。また紙幅の関係で今回は、*Illusions perdues* (『幻滅』)、*Splendeurs et Misères des courtisanes* (『娼婦の栄光と悲慘』) において同じように悪魔的契約を問題にできるヴォートランとリュシアンの関係については触れることができなかった。これらの点に関しての詳しい分析は今後の課題としたい。